

人はなぜ群れるのか？

多くの生き物には群れる習性がある。外敵から身を守り、食糧を確保し、子孫を残すためには孤立は適さない。仲間内での情報交換は、やがて後継者の教育となり、群れの強化は、老後を安泰に暮らす保証を与える。だから生き物は本能的に群れを作る。群れは外敵に対しては戦いを起こし、また、外敵から群れを守るための知恵を育てる。

惑星科学会は、“惑星科学の進歩に貢献するとともにその平和的応用及び普及を目的”(会則第2条)に結成された。境界領域に、新たなグループを作り、互いの理解と情報交換に努めてきた。また、惑星科学の成果を社会に還元し、後継者の教育にも力を注いできた。こうして、日本における地球惑星科学関連学会の統合に向けて、旗を振るまでの力量を備えてきた。

さて、学会として、食糧の確保と子孫を残すという側面はどのように対処しているのだろうか？若手の研究者を育てるためには資金とポストが要る。パイが決められた状況では、ビルト・アンド・スクラップを打ち出して、魅力ある将来計画の基で、資金とポストの獲得に乗り出さなくてはいけない。宇宙に係わる国の政策の中で、惑星科学分野の位置づけを確固としたものにする努力が求められている。また、納税者に理解を求める必要から、何を、如何に訴えていくのか、という戦略の立案が急がれる。

食糧を確保するために、野望を抱いて、中原に仲間を集め、周辺関連学会の統合にまい進する道がある。一方では、後継者養成に向けて、大学、学部の壁を越えた、近隣同業者による若手院生教育システムの構築や、惑星科学の研究重点施策の策定と、その実現にむけた戦略の構築を練る道がある。各地に散らばる小さなグループの群雄割拠は、この先20年の大学・研究機関の統合、生き残りの戦いの中では、無力になる。これらを束ねる役割を果たすことが、学会に期待されている。基幹大学・研究グループの設定と、その求心力による学会全体の地位の向上を策するという道も探らねばならない。

いずれの道を進んでも、“外敵との争い”が待っている。群れに力を蓄え、群れの発展を力づくで実現する必要がある。果たしてこうした攻撃的な未来が惑星科学会にとってふさわしい将来像なのだろうか？目先の利害や要求の実現だけのために、人は群れるのだろうか？適正規模を守って、仲間内の情報交換のサロンとして生き残るという道もあるのではないか？

何のために惑星科学会は存在し、どんな活動に重点を置いていくべきなのか。議論が起これば幸いである。

向井 正 (神戸大学)